

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：16201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2022

課題番号：15K02003

研究課題名（和文）ベルクソン哲学と当時の社会科学の関係に関する文献的・実証的研究

研究課題名（英文）The research on the relation between the philosophy of Bergson and social science at that time : analysis on the references in The Two Sources of Morality and Religion

研究代表者

三宅 岳史 (MIYAKE, takeshi)

香川大学・教育学部・教授

研究者番号：10599244

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ベルクソンの『道徳と宗教の二源泉』（『二源泉』と略記）の議論と当時の社会科学の関係を分析した。まず、コントやスペンサーの社会有機体説とデュルケームの社会学が『二源泉』第一章にどのような影響を与えたかを検討した。次に、レヴィ=ブリュールの人類学とデュルケームの宗教社会学と『二源泉』第二章の静的社会を比較し、「迷信」という主題について彼らの見解の相違を論じた。さらに、『二源泉』第三章と当時の神秘主義の研究（ジェイムズ、ドラクロワなど）を関係づけ、哲学と科学の関係について考察をした。最後にジーナ・ロンブローゾの産業技術論が『二源泉』第四章に予想以上に影響を与えていたことを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の研究では、ベルクソン哲学が『物質と記憶』『創造的進化』などで、当時の生物学や心理学、病理学や大脳生理学などの諸成果をもとに彼の哲学を形成したことは示されてきた。本研究によって、『道徳と宗教の二源泉』という晩年の著作についても、当時の社会学、人類学、宗教心理学、技術論といった社会科学の分野でも、自然科学の分野でこれまで行われたのと同様に、実証諸科学の成果をもとに彼の哲学の問題のフレーミングが行われ、それをもとに諸概念が形成されてきたということ、彼が用いた当時の社会科学などを実証的・文献的に追跡することによって、明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）： In this research, I analyzed the relation between Bergson's arguments in The Two Sources of Morality and Religion (hereafter MR) and social science at that times. Firstly, I examined how Comte's and Spencer's social organism and Durkheim's sociology made influence on the first chapter of MR. Secondly, I compared the second chapter of MR, that is, the theory of static society with Levy-Bruhl's anthropology and Durkheim's sociology of religion, I pointed out that there were differences among their point of views concerning the theme of "superstition". Thirdly, I related the third chapter of MR to the studies of mysticism in those days (W. James, H. Delacroix etc.), then considered the relation between philosophy and science. Lastly, I revealed that the thought of industrial technology by Gina Lombroso made more influence on the last chapter of MR than we expected.

研究分野：哲学

キーワード：ベルクソン 社会有機体 静的社会 閉じたもの/開いたもの 迷信 融即律 神秘主義 技術論

1. 研究開始当初の背景

2000年あたりからフランスでも日本でもベルクソン哲学の研究は、隆盛を見せている。フランスでは、Frédéric WORMSによる*Annales bergsonniennes*(『ベルクソン年報』)の刊行(2002年~)やArnaud FRANÇOISやCamille RIQUIER、Élie DURINGなどの若手研究者の出現、そしてベルクソンのテキストにも、注釈が新たに追加された*l'édition critique*版が編集されている。また国内でも『創造的進化』100周年をきっかけにベルクソンの国際シンポジウム(Project Bergson in Japan)が2007-2009年と2010-12年の2期6年にわたり開催され、研究者の国際交流も活発に続き、若手研究者も次々に育っている。

このようなベルクソン研究の新たな傾向としては、忠実なテキスト読解に基づくものであり、それらがベルクソン研究の隆盛に厚みを与えている。本研究も先に説明したようなベルクソン哲学研究の動向と共通点を有するが、そのような文献的・実証的な研究手法を、ベルクソンと当時の科学との関係に適用する。数学・物理学から生物学・心理学までの研究については三宅岳史(2012)『ベルクソン哲学と科学との対話』(京都大学学術出版会)を出版したので、本研究では社会科学とベルクソン哲学との関係に焦点を絞る。以上が、研究開始当初の学術的背景である。

2. 研究の目的

本研究はベルクソン哲学を当時の実証科学ととりわけ社会科学(社会学、人類学、技術論など)との関係から明らかにすることを目的とする。このため、ベルクソンの著作の中でも、デュルケームの社会学やレヴィ＝ブリュールの人類学などの文献が参照されている『道德と宗教の二源泉』(以下『二源泉』と略)を主要テキストとして分析を行う。ベルクソン哲学が当時の科学との対話から発展してきたことは、応募者がこれまで明らかにしてきたことだが、これは『二源泉』という著作にも当てはまるものが予測される。道德や宗教といった面から議論されることの多かった『二源泉』を関連する社会科学の文献解読から実証的に分析することは、ベルクソン哲学研究に独創的な観点を与えるだけでなく、科学・宗教・社会の現代に連なる問題系を捉え直す切り口にもなることが期待される。

3. 研究の方法

本研究ではおもに以下のような各テーマを設定した。

- 1) 社会学の固有性の問題：ベルクソンは社会学と生物学の間をどのようにとらえていたのか。特に社会学と生物学の連続性と非連続性について、コント、スペンサー、デュルケームなどと比較したとき、ベルクソンの社会に関する思考の特徴がどの辺にあるのかを明確にする。
- 2) 「迷信」をめぐる問題：『二源泉』第二章「静的宗教」では、動物は迷信をもたないのに、知的存在である人間はなぜ迷信に憑依されるのかという問題をめぐり、レヴィ＝ブリュールの人類学(「融即律」)やデュルケームの宗教社会学が取り上げられる。迷信という問題系に対して、彼らの言説がどのように類似点や相違点をもつのかを研究する。
- 3) 神秘主義と哲学的方法の問題：『二源泉』第三章ではジェイムズ、ドラクロワやモンモランといった神秘主義を心理学によって扱う著作が参照される。これらの著作を分析することで、科学との対話によって哲学を進める実証的形而上学という『二源泉』の哲学的方法と神秘主義との緊張関係について、当時の神秘主義研究との異同に目を配りつつ、探究する。
- 4) 技術哲学の問題：ベルクソンは『二源泉』第四章で科学と技術を本質的に区別し、技術を生物的進化論に接続している。このような技術哲学と第四章であげられているジーン・ロンブローゾなどの著作はどのような関係があるのかについて分析を行う。
- 5) 社会的紐帯と宗教的なものの問題：大革命以降、不安定な政体が続いたフランスでは、宗教が有していた社会的紐帯(デュルケームのトーテム原理など)をどのように取り戻すかは、哲学にとって最大の問題であった。『二源泉』の社会統合の真の原理は開かれたものである。デュルケームらと比べベルクソンではどのようにこの問題が変形したかを最後に扱う。

4. 研究成果

1) コント、エスピナス、スペンサー、初期デュルケームの文献を分析し、彼らに見られる社会学と生物学の連続性と非連続性について分析を行った(三宅岳史(2020)「ベルクソンと社会有機体説」京都哲学史研究会で発表)。その結果、『二源泉』が刊行されたときには、すでにデュルケームによって社会学とその固有性は確立されており、社会学と生物学を類比的、連続的展開としてとらえるコントやスペンサーの社会有機体説は時代遅れになっていたにもかかわらず、ベルクソンはデュルケームの社会学よりは、生物的進化の上で社会を連続的に論じ、その意味では社会有機体説へ戻る一面があることが判明した。閉じられた社会の責務は、アリやハチの社会と連続的に捉えられる。また開かれたものも例えば神秘家の出現などは、「単一の個体から構成される新たな種の創造のようなもの」(MR 97)と述べられ、進化の原理で説明される側面があり、『二源泉』の議論は社会有機体説に部分的に含まれる一面がある。

ただし、『二源泉』は社会有機体説からはみ出す部分をも含んでおり、スペンサーの社会的進化論とも異なる。ベルクソンは生物進化の獲得形質の遺伝を批判しており、生物進化と文明の進

歩を明確に区別している。「文明が人間を深く変容させてきたならば、それは貯水池のように知識や習慣を蓄積することによって、社会が個人にそれらを注ぎ込むからである。」(MR 132) 社会の深層には生物的進化の力が働き、二つの源泉も生命的なものであるが、社会の表層は進歩という別の原理が働いているのである。ベルクソンがデュルケームと距離をとるのは、社会でも生物に由来する力は強く作用しており、デュルケーム的な社会学ではこの力が不可視になるためである。とはいえ、ベルクソンは生物還元主義をとるわけではない。社会では生物学的原理が働くとしても、それはつねに社会的環境を通して作用する。例えば、神秘家の出現自体は生物進化の作用であるとしても、神秘家の出現後に開かれたものを伝達するエラン・ダムールは言語や文化の表層なしには伝わらないと考えられる。また静的宗教でも文化に蓄積されたものの力は大きく、迷信と科学の分化は先述の表層で行われると考えられる。以上の分析により、社会学と生物学をめぐる『二源泉』の独自性のある程度明らかにできたと考えられる。

2) 「迷信」をめぐる問題を探るために、レヴィ＝ブリュール『未開社会の思惟』およびデュルケーム『宗教生活の原初的形態』といったテキストを主に分析を行い、『二源泉』第二章の迷信や創話機能と比較を行った。比較においては(1)迷信の起源、(2)知性と情動の関係、(3)原始心性から文明的心性への移行、(4)個人と社会の関係、(5)「原始」社会の始原性の規準といった5つの論点について三者の議論の比較を行った(三宅岳史(2021)「迷信の源泉と行方」『静的宗教論と人類学の交錯』『哲学的エッセイ』石川徹先生退職記念誌』美巧社、120-132頁)。

紙幅の関係上、ここでは以上の5つの論点の比較結果については、詳細な報告ができないが、主要な点を要約すると以下の通りである。まず、レヴィ＝ブリュールは迷信のもとになる「融即律」を未開社会の根本に置き、我々の文明社会はそれと本性的に異なる「矛盾律」が基盤にあるとする。ベルクソンはこれに対し、未開社会と文明社会の本質的差異を認めない。知性がもたらす不安を緩和させるための本能の残滓の働き(創話機能)が迷信の起源にあり、これは文明社会でも未開社会でも閉じた社会であれば同程度に強く機能するのである。他方でデュルケームは、融即律については批判しており、文明と未開の間に本質的差異を認めないという点ではベルクソンと一致する。しかし、デュルケームはベルクソンのようには迷信に固有の起源(本能の残滓)を与えず、宗教も科学も源泉(トーテム原理など)は同じであるとする。しかし彼は、社会を支える宗教は科学が発展しても残るが、迷信についてはそのような積極性を認めないため、社会が進歩するほど迷信は弱くなると考える。このため、社会環境がいくら進歩しても、深層には本能の残滓が強く働き、人類は迷信に囚われる恐れがあると考えたベルクソンとは違いが存在することになる。以上が『二源泉』と当時の人類学や宗教社会学との比較から得られた成果である。

3) ジェームズやドラクロワの著作を分析し、神秘主義を心理学的方法によって扱う当時の研究の分析を行った(未発表)。ジェームズを分析していくと『宗教的経験の諸相』は確かに心理学的方法が用いられているが、そこで論じきれなかった形而上学的問題は『多元的宇宙』などで扱われており、またそこでの議論の背景にベルクソンも関心を抱いていた心霊主義が関わっていたため、当初予定にはなかったマイヤーズやカーディックなどの心霊主義の著作や、オープンハイム『英国心霊主義の抬頭』など心霊主義に関する研究にも目を通した。そこで、ベルクソンも一時会長を務めた心霊現象研究協会(SPR)などは心霊主義が科学的手法を標榜し、形而上学と科学の関係に関わる問題であることが判明した。『二源泉』でも重要な箇所では心霊主義が明示されない形で用いられるなど、研究の対象が広がり、集約に時間がかかっているため、今後はドラクロワやモンモランなど心理学的研究の『二源泉』への影響、死後の生など心霊主義のテーマが『二源泉』にどのように位置づけられたかなどを研究としてまとめる予定である。

4) ジーナ・ロンブローゾ『進歩の悲劇』を分析し、『二源泉』への影響を考察した(三宅岳史(2023)「ジーナ・ロンブローゾの産業技術論」ベルクソン哲学研究会で発表)。その結果、当初の予想とは異なり、ベルクソンの技術哲学についてというよりは、『二源泉』第四章後半の問題の枠組みや、議論の方向性に大きな影響を与えていたことを示すことができた。具体的には、二重狂乱の法則の内実(傾向の入れ替わり)を与えるのに重要な材料を提供しており、単純な生活への回帰という解決策については、ジーナ・ロンブローゾも同様の解決策を示している。また機械的発明がニーズを作るのか、ニーズが機械的発明を導くのかという『二源泉』の重要な問いもすでにロンブローゾが著書で示しているものである。また細かな内実は異なるものの、快楽と歓喜という大きな枠組みも、この著作に現れる。彼女は植民主義批判や産業と戦争の関係も論じており、これらも『二源泉』に間接的に影響を合が得ていると思われる。ジーナ・ロンブローゾは父親のチェザレ・ロンブローゾに比べると知名度は低く、その著作も研究されているとは言い難いが、『二源泉』への影響については、予想よりも大きく豊かな成果が得られる結果となった。

5) 社会統合の原理と問題について、ベルクソンとデュルケームの比較を行った(三宅岳史(2020)「スピリチュアリズムの変遷」『世界哲学史VII』筑摩書房、第8章、201頁~223頁で研究成果を部分的に発表)。デュルケームは社会的紐帯の問題をトーテム原理など人類学にさかのぼって探究したが、このテーマが『二源泉』では第二章で論じられているように、ベルクソンにとってそれは閉じた社会に属するものである。『二源泉』では社会的紐帯は閉じたものから開いたものへ移行し、その背後にはフランス一国の社会的安定という問題から、第一次世界大戦にみられるような国家同士の対立が人類滅亡に至る恐れがあるという問題へとシフトしていることがあるが、人類概念については両者の間に連続性がある点について考察を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 三宅岳史	4. 巻 21
2. 論文標題 実証的形而上学と拡張ベルクソン主義	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 アルケー	6. 最初と最後の頁 17-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三宅岳史	4. 巻 20
2. 論文標題 ベルクソンとドリーシュの目的性概念	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 フランス哲学・思想研究	6. 最初と最後の頁 168-179
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三宅岳史	4. 巻 44-6
2. 論文標題 リーマンと心理学、そして哲学	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 現代思想 2016年3月臨時増刊号	6. 最初と最後の頁 161-175
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 三宅岳史
2. 発表標題 迷信の源泉と行方 静的宗教と人類学
3. 学会等名 京都哲学史学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 三宅岳史
2. 発表標題 ジュール・タンヌリ『科学と哲学』を分析する
3. 学会等名 Project Bergson in Japan科学研究費B「ベルクソン『時間と自由』の総合的研究」エピステモロジー研究班分科会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 三宅岳史
2. 発表標題 実証的形而上学と拡張ベルクソン主義
3. 学会等名 関西哲学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 三宅岳史
2. 発表標題 ベルクソンと社会有機体説
3. 学会等名 京都哲学史研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 三宅岳史
2. 発表標題 持続と計測 ジュール・タンヌリによる論争の背景
3. 学会等名 Project Bergson in Japan エピステモロジー分科会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 三宅岳史
2. 発表標題 多様体の哲学史的系譜
3. 学会等名 数理哲学史研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 三宅岳史
2. 発表標題 拡張ベルクソン主義と実証的形而上学
3. 学会等名 日仏哲学会 提案型ワークショップ
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 三宅岳史
2. 発表標題 時間の非可逆性は実在するか
3. 学会等名 シンポジウム：「現在」という謎（九州大学QRプログラム）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Takeshi MIYAKE
2. 発表標題 Bergson and the Rise of the "Sciences of Memory"
3. 学会等名 7th International Workshop of Project Bergson in Japan 2015 (国際学会)
4. 発表年 2015年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 伊藤邦武、中川明才、竹内綱史、佐々木隆治、神崎宣次、原田雅樹、小川仁志、三宅岳史、冨澤かな、苅部直ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 281
3. 書名 『世界哲学史7』第8章「スピリチュアリズムの変遷」	

1. 著者名 川口茂雄、越門勝彦、三宅岳史編著ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 408
3. 書名 『現代フランス哲学入門』	

1. 著者名 武田裕紀、村松正隆、三宅岳史編著ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 朝日出版社	5. 総ページ数 80
3. 書名 『フランス語で読む哲学22選 モンテーニュからデリダまで』	

1. 著者名 森田邦久	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 320
3. 書名 現在 という謎	

1. 著者名 フレデリック・ヴォルムス、ポール＝アントワヌ・ミケル、村上靖彦、増田靖彦、谷淳、三宅陽一郎、三宅岳史、バリー・デイントン、伊佐敷隆弘、スティーヴン・D・ブラウン、杉村靖彦、伊東俊彦、アンヌ・ルフェーヴル、平光哲朗、永野拓也、谷口薫	4. 発行年 2018年
2. 出版社 書肆心水	5. 総ページ数 415
3. 書名 ベルクソン『物質と記憶』を再起動する	

1. 著者名 平井靖史、藤田尚志、安孫子信、村山達也、カミーユ・リキエ、檜垣立哉、バリー・デイントン、清水将吾、永野拓也、デイヴィッド・クレプス、太田宏之、マイケル・R・ケリー、ジャン＝リュック・ブチ、兼本浩祐、三宅岳史、ユリア・ポドロガ、増田靖彦	4. 発行年 2017年
2. 出版社 書肆心水	5. 総ページ数 381
3. 書名 ベルクソン『物質と記憶』を診断する	

1. 著者名 ジル＝ガストン・グランジェ（翻訳：松田克進、三宅岳史、中村大介）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 白水社	5. 総ページ数 161
3. 書名 科学の本質と多様性	

1. 著者名 ポール＝アントワヌ・ミケル、三宅岳史、ジョエル・ドルボー、藤田尚志、合田正人、スティーヴン・ロピンズ、河野哲也、檜垣立哉、セバスチャン・ミラヴェット、平井靖史、バリー・デイントン、岡嶋隆佑、伊佐敷隆弘、エリー・デューリング、郡司ベギオ幸夫	4. 発行年 2016年
2. 出版社 書肆心水	5. 総ページ数 383
3. 書名 ベルクソン『物質と記憶』を解剖する	

〔産業財産権〕

〔その他〕

香川大学研究者総覧
http://www.ceda.kagawa-u.ac.jp/kudb/servlet/RefOutController?exeB0=WR4100RB0&monitorID=WR4100&workType=detail&primaryKey=1000028128&kyoinID=&gyosekiNendo=null&secondaryKey=&dummyKyoinID=¤tPage=1
香川大学研究者総覧詳細
http://www.ceda.kagawa-u.ac.jp/kudb/servlet/RefOutController?exeB0=WR4100RB0&monitorID=WR4100&workType=detail&primaryKey=1000028128&kyoinID=&gyosekiNendo=null&secondaryKey=&dummyKyoinID=¤tPage=1

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------